

3. ラオスの人口移動と出生力
4. マレーシアの経済発展と人口変動
5. 中国の国際人口移動

[第9部会]

1. 日本人口の地理的分布に関する歴史的考察
2. 近世上名栗村の養女に関する分析
3. 石見天領の人口変動
4. 『日本疾病史』データベース化の試み
5. 年齢別死亡率を用いた歴史人口遡及推計
6. 統計GISプラザについて

中川聡史（神戸大学）
 <座長>若林敬子（東京農工大学）
 高橋眞一（神戸大学）
 大塚友美（日本大学）
 早瀬保子（元アジア経済研究所）

<座長>石南國（城西大学）
 鬼頭宏（上智大学）
 戸石七生（東京大学）
 廣嶋清志（島根大学）
 <座長>斎藤修（一橋大学）

浜野潔（関西大学）
 林玲子（政策研究大学院大学）
 相田昇（総務省統計局）
 （加藤久和記）

日本中東学会第20回大会

日本中東学会（会長：小杉 泰・京都大学教授）の第20回大会（実行委員長：永田雄三・明治大学教授）が2004年5月8日（土）～9日（日）の2日間にわたって神田駿河台の明治大学リパティータワーで開かれた。初日の午後には公開講演会、アラブ音楽レクチャー・コンサート、総会が行われ、2日目には午前・午後とも5部会が設けられた。今回の公開講演会「<オリエンタリズム>再考」（講師：杉田英明・東京大学）、「サハラ日本人」（講師：小堀 巖・国連大学）はいずれも興味深いものであったが、人口には直接的な関係がなかった。他方、人口に関係する報告としては以下の4つがあった。

CHO, Hee Sun（韓国・明知大学校）"Islamic Family Law, Possibilities of Reform from a Women's Rights Perspective: A Study on Egyptian Intellectuals' Perception of the Family Law"

小島 宏（国立社会保障・人口問題研究所）「東南アジアにおけるイスラームと教育達成」

Ali EL-SHAZLY（Cairo University）and GOTO Yutaka（弘前大学）"An Attempt of GIS Analysis on Urban Development in the Edge of Greater Cairo"

大河原知樹（東北大学）「近代における移民運動とユダヤ教徒：イギリス・オスマン関係を中心として」

なお、来年の第21回大会は5月14～15日に大阪府吹田市の国立民族学博物館で開催される予定である。（小島 宏記）

2004年度日本女性学会大会

本大会は、2004年6月12日と13日、鳥取県立倉吉未来中心で開催された。鳥取県の行政関連の方や

市民を含め、学会員でない参加者も大勢見られた。大会では4つの分科会で合計16の個人研究報告がなされた。筆者は、第12回出生動向基本調査のデータを使い、「シングル女性のライフコースに対する考え方」と題する報告を行なった。女性学は学際的であり、研究者のみではなく、活動家や市民と共に築く「学問」であるため、分科会といっても、内容はまちまちになってしまうが、筆者と同じ分科会では、立命館大学・博士課程の山地久美子さんによる「家族型福祉国家の社会政策における家庭像—日本の女兒選好・韓国の男児選考による社会学的分析」という報告があった。

本大会のメインである『ウーマンリブが拓いた地平』と題された大会シンポジウムでは、田中美津さんが『自縛のフェミニズムを抜け出して—立派になるより幸せになりたい—』というタイトルで基調講演を行い、その後、異なる世代の女性が、自分とリブとのかかわりを中心に語るパネルディスカッションを行なった。大学院生や専任の職につかない「弱い立場」にある者と、「定職」のある研究者・教員との力関係も問題のひとつとして取り上げられた。このような問題を学会の場で正面から取り上げられることのできるの、本学会ならではのことだろう。（釜野さおり記）

アメリカ人口学会2004年大会

アメリカ人口学会 (Population Association of America) の2004年大会が4月1日～3日マサチューセッツ州ボストンにて開催された。米国のみならず世界各国から2000人近い参加者があり、例年通り盛況であった。セッション・テーマは出生・家族計画、家族形成と解消、健康・死亡、移動、世帯、高齢化、推計、方法論、歴史人口など多岐にわたり、必ずしも米国国内の問題に限らず、欧州やアジア、途上国との比較研究も盛んであった。日本でなじみ深い、低出生率や高齢化といったテーマ以外にも、国際人口移動、Intermarriage、HIV/AIDS、暴力、貧困、母子の健康といった問題に関する報告が数多く見受けられた。実証分析に関しては、大規模なパネルデータや国際比較調査に基づいた高度な分析結果が紹介されていたが、そこには各大学や人口研究に関わる各組織がデータの提供や整備に尽力してそうした研究活動を支え、研究者側もそのような取り組みを高く評価するとともに、着実な成果を産み出すという循環が機能しているように思われた。U.S. Census Bureau の研究員が Helping you make informed decisions という組織のキャッチコピーを紹介しながら高度かつ有用性が理解できる分析結果を報告しているのが印象的であった。先進諸国の出生力については、出生意欲そのものの低下が、完結出生児数を大幅に下げることになるとの見通しや、経済力と介護の両方を期待できる女兒を選好する風潮が北欧諸国で強まっているといった現状が紹介された。死亡を中心とした数理人口学のセッションでは、Schoen、Bongaarts、Lee といった世界を代表する人口研究者が新たな議論の展開を予感させる大胆な報告を行い、熱気あふれる会場となった。寿命の将来予測についても一段と進歩する可能性が大いに期待できる。

本研究からは金子隆一が “On Changing Factors of Marriage Transformation in Japan: Decomposition of Delay in Women's First Marriage Process”, 岩澤が James Raymo 氏と共同で “Premarital Pregnancy and Spouse Paring Patterns in Japan” を報告した。日本はアジアの先進国かつ超低出生力、最高寿命の国として海外の研究者からも大きな関心を寄せられている。こうした活動の場で、情報提供および意見交換を行うことは国内外の人口研究にとって大変有意義と思われる。（岩澤美帆記）